

聖書：ピリピ人への手紙1章1～11節

説教：すぐれたものを見分ける

ときどき、有名ブランドとそっくりの偽ものが売られて事件になることがあります。バッグや靴ならばよく見れば本物と偽物を見分けることはできるかも知れません。しかし、これが米とか牛肉となれば、素人が見分けることはほとんどできません。とは言え、たとえ偽物を食べたからと言ってただちにいのちに危険が及ぶことはないでしょう。しかし、なかには本物と偽物をきちんと区別しないと、いのちに関わるようなことがあります。

今日からしばらくピリピ人への手紙を見て参ります。10節に、「あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるように」とあります。いのちに関わるほど大切なこととパウロは考えていたようです。今日はそこに目を留めていきます。

1 パウロが福音を伝えたピリピ

内容に入る前に、そもそもピリピ人とはだれなのか。そこから見ていきます。パウロは、もとはパリサイ派の熱心なユダヤ教徒で、かつてはクリスチャンを迫害し、逮捕し、牢獄に投げ込んでいた人でした。しかしあるとき救い主イエスに出会い、劇的な回心をしてクリスチャンになります。そして殉教するまで、主にユダヤ人以外の異邦人の町を訪ねながら救いの福音を伝える働きに生涯をささげました。その町の一つがピリピです。場所はちょうど今のギリシャのなかにあります。パウロの時代は政治的にかなり重要な町であったようです。現在は町は残っていません

が、当時の遺跡が残っているそうです。

そのピリピの町をパウロが初めて訪れたときの様子が使徒の働き16章に出ています。そこでは、最初に紫布の商売をしていたルデヤが救われ、占いの霊につかれていた女性も救われ、監獄の番人も救われていきました。この人たちはピリピ教会の最初のメンバーになっていきます。パウロが去ってから、人々は福音を伝え続け、少しずつ教会も成長していきます。

いろいろ説はあるのですが、それからおよそ十年ほど経過し、パウロはおそらくローマと思われませんが、獄中に捕らえられてしまいます。その知らせを聞いたピリピの教会は、献金やいろいろな品物を持たせてテモテとエパフロデトの二人をパウロの所に派遣しました。そのうちのエパフロデトがピリピに帰るとき、パウロが書いたお礼状がこの手紙です。

2 すぐれたものを見分ける

1) ピリピ教会

ピリピとローマのこの二つの町は、今なら行き来することはそんなに難しいことではないでしょう。しかし、当時の人々にとってはかなり大変なことでした。手紙の中に後で出て来ますが、エパフロデトは、旅の労苦のために死にかけるほどの重病に陥り、パウロのもとでしばらく静養しております。旅行と言っても、命懸けだったのです。ピリピの教会がふたりをパウロの所に送る決断をした

とき、そこには大きな苦勞がありました。

2) パウロの二つの祈り

パウロは、エパフロデトが旅の疲れで弱り果て病の中に苦しんでいるのを見たとき、ピリピ教会がどれだけ自分のことを心配してくれていたのかを深く味わったことだろうと想像します。そんなピリピの人々に向けてパウロはこう言っています。9節から11節。

「私は祈っています。あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。またあなたがたが、キリストの日には純真で非難されるところがなく、イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされている者となり、神の御栄えと誉れが現われますように。」

パウロは主に二つのことを祈っています。簡単にまとめると一つは、「真にすぐれたものを見分けることができるように。」二つ目は、「キリストの日には純真で非難されることがないように。」もちろん、この二つの祈りは別々のものではなく、つながっています。どこでつながるかと言えば、「キリストの日」ということばが鍵になります。

3) キリストの日

キリストの日とは、主が再び来られる日のことを指します。主は十字架で死なれ、三日目によみがえられ、今は父なる神の右の座におられます。でも、もう一度この方は私たちのところに来られ、私たちに救い、約束の天の御国に招いてくださる。それが私たちの望みです。その日のことです。

つまりパウロはこう言いたいのです。「あ

なたがたは、いつも真にすぐれたものを見分けるようにしてください。そうすれば、主の再臨のときに、純真で非難されることがなく、義の実に満たされ、神の御栄えと誉れを現すことができるでしょう。」別の言い方をすれば、こうなります。もし真にすぐれたものを見分けることができなければ、主の再臨のときに、あなたがたは非難され、義の實を失い、神の御栄えと誉れを現すことができない。深刻な場合は、もしかして救いを失うことさえありうるということになります。真にすぐれたものを見分けることができるかどうか、結局そのことが私たちのいのちを得るか、失うかにつながると言っているのです。

4) 向き合う

こんなことを言うと不安を覚える方がいるでしょう。「私は見分ける力などないから、救いから漏れてしまうかもしれない。」安心していただきたい。パウロはいつも難しい言い方をします。ときには脅すような表現をします。これは彼の癖だと思った方が良いでしょう。よく見ると、実はそれほど難しいことを言っているのではない。ここもそうです。具体的に見ていきましょう。

ピリピ教会はなにををしましたか。投獄されているパウロのためにいのちをかけて励まそうとしました。それでテモテとエパフロデトのふたりを送り出した。危険を冒してそこまでやる必要はない。そういう意見も当然あったでしょう。でもピリピ教会は、パウロといっしょに苦しみを分かち合うべきだと最終的に決断しました。パウロの言い方を借りれば、ピリピ教会は、このようにして真にすぐれたものを見分けたのです。

もちろん、このことを一般化して、いつも

危険を冒すべきだと言っているのではありません。ときには、異なる判断がなされる場合も当然あります。でもそこで大切なことは何か。何をしたとか何をしなかったとか、結果だけを見るのではありません。どんな心をもって問題に向き合おうとしたか、そのことが最も大切なことだと言いたいのです。

そのことをパウロは 7 節の後半でこう言っています。「あなたがたはみな、私が投獄されているときも、福音を弁明し立証しているときも、私とともに恵みにあずかった人々であり、私は、そのようなあなたがたを、心に覚えているからです。」

パウロが苦しみの中にいたとき、ピリピの人々は当然その場にはいません。いっしょに投獄されたわけでもありません。裁判の場に連れ出され自分のことを弁明したのでもない。遠く離れたところにおりました。でも、ピリピの人々はパウロのことを無関係だとは思わなかった。逃げなかった。ごまかさなかった。パウロのことを思い、苦しみをともにしようとした。自分たちも犠牲を払うべきだと考えた。それが結局、真にすぐれたものを見分けたということになりました。

3 主が完成させてくださる

こんなことを言うと、やっぱり「自分はとてもできない」と気落ちする方がいるかもしれません。安心してください。パウロはなんと言っていますか。6 節。「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることをわたしは堅く信じているのです。」

いま、ちゃんとできなければ、天の御国に入れないとか、失格しますとか、そんなこと

は言っていません。「キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださる」とあります。ということは、今は完成していませんということ。完成していないのですから、十分にできなくて当たり前。失敗して当然。もし完全にできるというのなら、その人はキリストの救いはいらぬことになりません。主が来なくてもよいことになる。けれども、主が再び来られると言われるのです。なぜ来なければならないのですか。私たちが不完全だからです。できないからです。できるのなら来る必要はない。ですから、「私はできないのです」と言えることが実は主のそばに近くあると私は思うのです。

今皆さんは、いろいろな悲しみを抱えていらっしゃるかもしれません。自分や家族がいま深刻な病気を抱えていて、悲観的なことしか見えない。愛していた家族や友人を病気や事故で失ってしまった。愛する人に深く傷つけられてしまった。信頼していた人に裏切られてしまった。そんなことを思い出すたびに、苦しみがわき起こります。逃げ出したいくなります。向き合いたくはありません。ふたをして見ないようにします。楽しいことだけを考えようとします。どうせ、どうにもならないことだから考えても無駄だとあきらめます。自分にはそんな問題はないと思ひ込もうとすることさえあります

しかし、ピリピ教会はパウロが投獄されたときどうしたでしょう。二つの選択肢の前に立たされました。安全なところに居て、パウロの苦しみから目をそむけるか。それとも、パウロの苦しみに向き合い、痛みをともにするのか。私たちも同じ所に立たされています。向き合うことは簡単なことではありません。苦しみと痛みを伴います。

でも、主は何をしてくださいましたか。私たちが苦しんでいる悲しみをともにされました。私たちの罪に向き合ってくださいました。私たちが目をそむけたくなる十字架に向かわれました。その主が、今私たちとともにいてくださり、できないと悲しむ私たちを励まします。主が私たちに向き合うことをしてくださいました。そのことを思い出します。

主がまず私たちの先を歩いてくださったのです。ですから、不十分な私たちではありますが、主が必ず完成させてくださるはずではないですか。その主を見上げて歩んでまいります。